

市民のページ

お届けします 「八重の桜」通信



2013年の大河ドラマで、会津藩士の娘・新島八重を主人公にした「八重の桜」が放送されることになりました。ここでは、新島八重に関する歴史やドラマに関連することなどを紹介していきます。

その2 会津での八重の交流

八重は、1845年11月3日に生まれまし

た。子どもの頃の八重は大変な力自慢だったようで、12歳のころには、60キログラムの米俵を4回も肩に上げ下げできたといわれています。また、当時の男の子は、石投げや石合戦を行っていましたが、八重も好きで、よく石投げをして遊んでいました。

この頃、17歳年上の兄・覚馬が江戸から戻り、日新館で蘭学の教授になりました。覚馬は、八重にとって大きな影響を与えてく



八重の生家、山本家があったのは現在の米代二丁目です。幕末当時、この一画は武家屋敷でしたが、戊辰戦争後、多くの屋敷が焼かれ山本家も残っていません。現在は、生家があった場所の近くに生誕の碑が建立されています

れた人で、鉄砲の打ち方も覚馬から教わっています。日新館は、上級武士の子が通う藩校でしたが、男子の学校だったため、八重は通うことができず、とても残念に思っていたそうです。

八重の生家の近隣には、日向家、高木家、伊東家といった武家の屋敷がありました。高木家には、目の不自由なおばあさんがおり、八重は日向家の娘ユキと共に、このおばあさんに針仕事を習っていました。**ユ**キは晩年、生まれ育った若松城下での思

い出や戊辰戦争の体験をつづった手記を残しています。「萬年青」と題されたこの手記には、盆踊りやきのこと狩り、お祭りといった当時の様子が生き生きと描かれています。落政時代の日常の記録はとも少なく、当時を知る貴重な資料として、今も活字で読むことができます。

山本家の東隣に住んでいたのが、白虎隊士の一人として知られる伊東梯次郎です。戊辰戦争直前15歳の梯次郎は八重に射撃を習っていました。最初のうち、雷管の音で目を閉じてしまつた梯次郎を八重は「臆病者」と叱ったといいます。また、梯次郎の髪が長く、動作の妨げになるとみるや、伊東家に無断で短く切ってしまいます。このことで八重は、母のさくにとっても叱られました。これらは、男勝りの八重の気性がよく表れたエピソードとして伝えられています。

▼監修：会津歴史考房 主宰・野口 信一さん